

「なに、この子どもだってだいじょうぶおともをします。嵐がつよくさえならなければ、十一時ごろまでにはウメアにおつきになれますよ。」と、わたしが、この子でまにあうかどうかとうたがいでもしたようにべんかいです。わたしは、どうも嵐がごうごうなるのが心配でたまりませんでした。思いきって予定をかえて、今晚はこの村へとまろうかと考えかけました。しかしラルスはへいきで、もうどんどんひつじの毛皮のがいとうを着、毛皮のとりうちぼうしの両側のたれをおろしてあごにくくり、あつい毛おりのえりまきを、目ばかりのこして顔中にまきつけます。母親はストープの上にかわかしてある、うさぎの毛皮のあつい手ぶくろをとつてわたしました。ラルスは、すばやくそれをはめて、短い、なめし皮のむちをとりあげて、わたしを待っています。

わたしはがいうの上へ、さらに毛皮をかぶつて、ラルスといっしょに戸外へでました。そこには、いつのまにか雪がふりしきっています。はげしい風といっしょに雪片がびゅうびゅうと、よこなぐりにふきつけてはりのようにするどく顔にあたります。ラルスは手ばやく、やわらかいほし草をどつきり、その中へつめこみ、わたしのあとから、その中へとび乗りました。二人はきゆうくつにおしおしにすわり、ひざから腰へかけてとないの毛皮を、ぐいぐいおし

こみました。母親は戸口に立って見えています。そこからもれるあかりで、わずかに、そりや馬も見えていたのですが、ラルスがむちをならし、馬が歩きだし、母親が戸口をしめるとどうじに、きゆうに目のまえがまっくらになってしまいました。雪はびゅうびゅうふきつけます。ラルスはそのくらがりの中でも道がわかるとみえて、ごうごうびゅうびゅうとうなりをたてる左の森の音の中を、さくさくと、馬をみちびきます。

「ふいつ、左だ。よし。このまま、まっすぐに……。ほいほい歩け、アキセル。」と、ラルスは、たえず元気に馬へ話しかけます。

「もつと道のまんなかを歩けよ。アキセル。ほらほらまた左へよりすぎる。ようしよし。ほら、足の下がたいらになった。すこし走れよ。ふいつ。」

三

こうしてわたしもかくべつ不安もなしに、林をくだり、丘をあがり、またおりてはあがりして、走りまわりました。そのあいだもの十分二十分とたつあいだが、それは長いながい時間のよう
に思われました。ラルスは、馬とお話をしないときには、なんだか、わけのわからない小歌を